

永井 隆の生涯

明治41(1908)年	2月3日	島根県松江市学町にて生まれる
昭和3(1928)年		飯石小学校～松江中学校・高校を経て長崎医科大学に入学
昭和7(1932)年	3月	長崎医科大学卒業、同大学物理的療法科へ
昭和8(1933)年	2月	軍医として満州事変に従軍(1年3か月)
昭和9(1934)年	6月	カトリックの洗礼を受ける 霊名:パウロ
	8月	森山 緑と結婚
昭和10(1935)年	4月4日	長男 誠一(まこと)生まれる(～2001.4.4)
昭和12(1937)年	7月	軍医中尉として日中戦争に従軍(2年6か月)
昭和15(1940)年	4月1日	助教授/物理的療法科部長に就任
昭和16(1941)年	8月18日	次女 茅乃(かやの)生まれる(～2008.2.2)
昭和19(1944)年	3月3日	医学博士の学位を得る
昭和20(1945)年	6月	慢性骨髄性白血病で「余命3年」と診断
	8月9日	長崎医科大学にて原爆被災し重傷を負うも、3日間の救護活動をおこなう
	12日	三ツ山にて2か月間の巡回診療開始
	10月15日	上野町の自宅焼け跡に戻り、生活再建
	11月23日	浦上教会での原爆死者合同葬で、信徒代表として弔辞をのべる
昭和21(1946)年	1月28日	物理的療法科教授に昇任 ※昭和24(1949)年8月から休職、翌25(1950)年9月に退職
	11月17日	長崎医学会総会にて「原子病概論」と題し最後の講演。以降病床に伏す
昭和23(1948)年	3月	如己堂が建ち、移り住む
	10月18日	ヘレン・ケラー女史が如己堂を訪れる
昭和24(1949)年	5月27日	長崎医科大学で昭和天皇に拝謁
	8月1日	長崎市長の表彰を受ける
	12月3日	長崎市名誉市民の称号を贈られる
昭和25(1950)年	6月1日	国家表彰を受け、天皇から銀杯を賜る
昭和26(1951)年	5月1日	長崎医科大学病院に入院、午後9時50分に亡くなる(43歳)
	3日	カトリック浦上教会にて教会葬
	14日	長崎市公葬

著作

いずれも発行年月、■は隆が編集、★は隆が翻訳、◆は外国語に訳された本



昭和22(1946)年	★世界と肉体とスミス神父:12月
昭和23(1948)年	◆ロザリオの鎖:6月 亡びぬものを:9月
	◆この子を残して:9月 生命の河:12月
昭和24(1949)年	◆長崎の鐘:1月 花咲く丘:6月 ★野鼠:7月
	◆■原子雲の下に生きて:8月 ◆いとし子よ:11月
昭和26(1951)年	◆如己堂随筆:8月
昭和27(1952)年	乙女峠:9月 ◆■私たちは長崎にいた:10月
昭和53(1978)年	村医:4月
昭和54(1979)年	平和塔:11月
昭和63(1988)年	長崎の花 上巻:8月・中巻:10月・下巻:11月
平成元(1989)年	原子野録音:8月

長崎市永井隆記念館について



隆が亡くなった後、「うちの本箱」の精神は「長崎市立永井図書館」へと受けつがれました。昭和27(1952)年12月に完成したこの図書館は、昭和44(1969)年に「長崎市立永井記念館」と名称をかえて、隆の自筆の原稿や書画、遺品なども展示する施設となり、平成12(2000)年4月には「長崎市永井隆記念館」へと建てかえられ、訪れる人々に隆の“如己愛人”のこころと“平和を”の願いを伝えています。



長崎市立永井図書館(左は如己堂)



Library in memory of Dr. Nagai



永井隆之墓

長崎市目覚町26-26



長崎市目覚町の坂本国際墓地入口の一角に隆と緑が眠る墓地があります。

隆のふるさとの記念館も、たずねてみませんか

雲南市永井隆記念館

〒690-2404 島根県雲南市三刀屋町199-3

TEL/FAX:(0854)45-2239 ☎ un-nagai@bs.kkm.ne.jp



令和3(2021)年4月20日リニューアルオープンしました。



モニュメント「平和の鐘」

長崎市名誉市民 第1号
医学博士 永井 隆



長崎市永井隆記念館

〒852-8113 長崎市上野町22番6号

TEL/FAX:095-844-3496



☎ nagai-takashi@mxn.cncm.ne.jp

永井隆記念館ホームページ

<https://nagaitakashi.nagasakipeace.jp/japanese/>



開館時間 9時～17時 休館日 12月29日～1月3日

1階展示室観覧料 個人(15歳以上) ¥100

団体(15人以上) ¥80

小・中・高校生は無料です。

2階図書室の利用は無料です。

永井隆はどんな人？

長崎医科大学(現在の長崎大学医学部)で放射線医学を専門としていた医学博士です。

島根県松江市で生まれた隆は、医師をめざして長崎医科大学に入学、卒業後は放射線科医の道をあゆみます。

日本での放射線医学の普及と発展のために、隆は日々研究や患者の診察をつづけました。結核が流行したときには、1日に100人以上も

の診察を行ったりもしたために白血病にかかり、『あと3年の命』と診断されます。そして、その2か月後に原子爆弾に被爆しました。



中学生のころ

原爆によって妻の縁を亡くし、みずからも重傷をおった隆でしたが、無事だった医師や看護師たちとともに、被災者の救護活動を2か月間行いました。

やがて白血病が悪化し、寝たきりとなってからも、「長崎の鐘」や「いとし子よ」など多くの著作を通じて、人々に生きる勇気と希望をあたえ、戦争のおろかさや平和と命の大切さを訴えつづけました。



原爆で大けがをおう

如己堂



復興と平和のために努力する隆の姿をみて、浦上の人たち、特に隆と同じカトリックの信者たちが隆のために建てた家、それが「如己堂」です。

隆は43歳で亡くなるまでの3年間をここですごしました。

2畳ひと間のこの家で隆は、17冊におよぶ本を書き上げました。なかでも「長崎の鐘」や「この子を残して」は、映画や演劇も作られたほどのベストセラーになり、また、外国語に翻訳されて広く世界の国々で読まれたものもありました。

病床に倒れたといえども、まだ働く部分を探したら、手と目と頭とがあった。私はこれを使ってかせごとと思立った。一本を書くことがそれであった。

「倒れてのち始む」

私の新しい格言はこれであった。

「尊い貯金」(『いとし子よ』)



平和と復興をねがって

本の印税が入ると、隆はそのお金を使って、多くの人たちの協力のもと、次のようなことを行いました。

あの子らの碑(昭和24(1949)年11月3日)

隆のよびかけで、原爆を生きのびた子どもたちが書き上げた体験文をまとめた本『原子雲の下に生きて』の売り上げをもとに、原爆で亡くなった山里小学校の子どもたち1,300人の魂をなぐさめ、戦争のおそろしさと平和の大切さをいつまでも伝えるために、山里小学校の一角にこの碑をたてました。



永井千本桜(昭和23(1948)年12月ごろ)

原爆で荒野となった長崎を、ふたたび花さく場所にしようと、桜の苗木を千本買って学校や教会、病院、道路などに植えてもらいました。いまでも浦上天主堂や山里小学校などにこの桜がのこっていて、春にはきれいな花をさかかせています。



うちの本箱(昭和25(1950)年)

原爆ですきんだ子どもたちの心に夢と希望を

そんな思いから、隆は「うちの本箱」と名づけた図書室を作り、子どもたちに学びといこいの場をあたえました。

隆のよびかけで、日本国内をはじめアメリカからも本が贈られ、その数は5,000冊にもなりました。



平和を(昭和25(1950)年6月)

平和を求める心をいつも忘れないようにとの思いから、「平和を」の文字を寝たままで1,000枚書き、お見舞いにおとずれたお客さんや、はげましの手紙をくれた人々に贈りました。

戦争に勝ちも負けもない。

あるのは滅びだけである！

平和を！永久平和を！

～「長崎の鐘」由来(『花咲く丘』)

「平和を」のおもいを1枚1枚にこめて



自筆書「平和を」



如己愛人

平和を実現するための方法のひとつとして、「如己愛人」=おのれのごとくひとをあいせよ～自分を大切にするように、自分のまわりの人たちにも愛をもってやさしくしましょう～の言葉をのこし、すべての人がこの気持ちをいつも持ちつづけて、平和な世界を作っていくことをのぞみました。



自筆書「如己愛人」

わかいとし子よ。「なんじの近き者を己の如く愛すべし」

そなたたちにのこす私の言葉は、この句をもって始めたい。そしておそらく終わりもこの句をもって結ばれ、ついにはすべてがこの句にふくまれることになるであろう。

「いとし子よ」(『いとし子よ』)



誠

茅乃

メッセージ～隆からあなたへ

原子爆弾は長崎でおしまい！ 長崎がピリオド！

平和は長崎から！

“原子野に伏して”(『平和塔』)

平和を祈る者は、一本の針をも隠し持っていてはならぬ。武器を持っては、もう平和を祈る資格はない。

“平和の祈り”(『平和塔』)

世界平和についてむずかしい議論がくり返されているが、ほんとうに平和をもたらすのは、そんなややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力によるのだ。

“温かい手”(『いとし子よ』)

おたがいにゆるし合おう……

おたがいに不完全な人間なのだから

おたがいに愛しあおう……

おたがいにさみしい人間なのだから “平和塔”(『平和塔』)

私たちは、世界中に一人でも戦争を計画している人がいる間は、「平和を！」と叫ばずにだまってすすす権利をもちません。

“石も叫ぶ”(『私たちは長崎にいた』)

どん底に大地あり。

どん底まで落ちて、そこから立ち上がることできたのは、希望をしっかり持っていたからである。

“どん底に大地あり”(『花咲く丘』)



自筆書「どん底に大地あり」